

寄贈図書リスト

- ① 映像のフュシス, 三浦均, 四六判, 340ページ, 2,200円+税, 武蔵野美術大学出版局

- ② 驚異の太陽 太陽風やフレアはどのように起きるのか, 鈴木建著, 四六判, 216ページ, 1,700円+税, 日本評論社

月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日締切, 翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので, 締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp宛にお送りください。折り返し, 受領の連絡をいたします。

賞の推薦

第11回(令和2年度/2020年度) 「日本学術振興会育志賞」受賞候補者の推薦募集

日本天文学会からの推薦にて応募を希望される方は, ①~③の手続きをお願いいたします。

(<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/yoshiki.html>を参照)

- ①以下の提出書類をメール添付データで学会事務長宛て (jimucho@asj.or.jp)にお送りください。

(推薦は電子申請のみの取り扱いとなっています。)

- ・様式2-「見本」に必要事項を記入
- ・日本学術振興会 育志賞推薦書「@推薦理由」に記入
- ・推薦理由書 A・Bを記入
- ・研究の概要等 を記入

- ②天文学会推薦の場合の応募締切

- ・2020年6月18日(木)

- ③日本学術振興会育志賞の概要, 応募資格などの詳細は下記URLを参照下さるようお願いいたします。

<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/gaiyo.html>

第37回(2020年度)井上学術賞推薦要項

1. 概要: 自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を上げた研究者で, 2020年9月20日現在の年齢が50歳未満の者に対し, 井上学術賞(賞状および金メダル, 副賞200万円)を贈呈します。
2. 募集方法: 指定の関係38学会, および井上科学振興財団の選考委員経験者, 受賞後5年を経過した井上学術賞受賞者等からの推薦。
3. 日本天文学会からの推薦件数: 2件以内

4. 推薦締切日: 2020年8月31日(月)

日本天文学会 jimucho@asj.or.jp宛に必着。

5. <http://www.inoue-zaidan.or.jp>からダウンロードした推薦書に必要事項を記入のうえ, メール添付ファイルとして, jimucho@asj.or.jp宛てにお送りください。メールの件名は, 「第37回井上学術賞 応募 氏名」としてください。

なお, 井上学術賞, 募集要項, 推薦書等の詳細は, 上記のURLを参照くださるようお願いいたします。

第37回(2020年度)井上研究奨励賞推薦要項

井上研究奨励賞(Inoue Research Award for Young Scientists)の贈呈。

理学, 医学, 薬学, 工学, 農学等の分野で過去3年間に博士の学位を取得した37歳未満(2020年9月20日現在)の研究者で, 優れた博士論文を提出した若手研究者に対し井上研究奨励賞(賞状・メダルおよび副賞50万円)を贈呈します。

*2020年9月20日(日)井上科学振興財団必着

第13回(2021年度) 井上リサーチアワード募集要項

井上リサーチアワード(Inoue Science Research Award)の贈呈。

自然科学の基礎的研究で優れた業績を上げ, さらに開拓的發展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援することを目的とします。

自然科学の基礎的研究で博士の学位取得後9年未満のわが国の国公私立大学および大学共同利用機関に所属(予定を含む)する研究者で, これまでの成果を踏まえ, 単独でまたは共同研究者の協力を得て行う将来性豊かな研究者に対し井上リサーチアワード(賞状

および研究助成金一人当たり500万円)を贈呈します。

*2020年7月31日(金) 井上科学振興財団必着

井上研究奨励賞・井上リサーチアワード推薦についての詳細は下記URLをご参照ください。

<http://www.inoue-zaidan.or.jp/>

2020年度の島津賞・島津奨励賞の推薦募集

1. 島津賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において、著しい成果を上げた功労者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会から推薦のあった候補者を、選考委員会が選考し、島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。毎年度1件、賞状、賞牌、副賞500万円を贈呈します。

2. 島津奨励賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果を上げ、かつその研究の発展が期待される45歳以下(4月1日時点)の若手研究者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会および当財団関係者から推薦のあった候補者を、選考委員会が選考し、島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。毎年度、3件以下、賞状、賞牌、副賞100万円を贈呈します。

■応募方法

必要書類一式を財団ホームページよりダウンロードしてご提出ください。

島津科学技術振興財団ホームページ:

<https://www.shimadzu.co.jp/ssf>

■推薦締切

2020年7月31日(金)(消印有効)

※島津賞、島津奨励賞の候補者については、日本天文学会から推薦をすることになりますので、必要書類については7月15日(水)必着で事務局長宛にご送付くださるようお願いいたします。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地

公益財団法人島津科学技術振興財団 事務局

TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241

URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>

E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

研究助成

2020年度島津科学技術振興財団 研究開発助成の募集

科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究を対象とし、原則として、国内の研究機関に所属する45才以下(4月1日時点)の新進気鋭の研究者(国籍不問)に助成します。

助成金額: 総額2,300万円(1件につき100万円)。

■応募方法

必要書類一式を財団ホームページよりダウンロードしてご提出ください。

島津科学技術振興財団ホームページ:

<https://www.shimadzu.co.jp/ssf>

■応募締切

2020年7月31日(金)(消印有効)

財団事務局宛

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地

公益財団法人島津科学技術振興財団 事務局

TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241

URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>

E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

会務案内

日本天文学会 2020年春季年会報告

2020年度春季年会は、3月16日(月)から19日(木)の4日間、筑波大学筑波キャンパス(茨城県つくば市)にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し、開催を中止した。開催中止に伴い、通常セッションと企画セッションについては、講演ファイル、ポスターファイルのウェブ掲載を持って発表成立とした。発表が成立した講演数は573件であった。以下に報告するように、4件の企画セッションが成立した。また、特別セッション「X線分光撮像衛星—XRISM—」が予定されていたが、次回以降の年会に延期することとした。林忠四郎賞・研究奨励賞受賞記念講演についても次回以降の年会に延期することとした。特別セッションの天文教育フォーラム、公開講演会、展示コーナー、懇親会は中止とし、保育室は設置しなかった。記者会見は中止としたが、中止になった記者会見の講演内容について各機関から今後

レスリリースが行われる場合は、学会としても協力する予定である。ジュニアセッションについては、以下に報告するようにセッションを実施しなかった。開催地理事の久野成夫氏や開催地実行委員の筑波大学宇宙理論・観測研究室の皆さんには、開催の準備や中止の対応などでご尽力いただいた。

〈企画セッション〉

[ALMAとすばるのシナジーによる銀河研究]

世話人：伊王野大介，田中賢幸，児玉忠恭，
河野孝太郎，松田有一，泉拓磨，
諸隈佳菜，但木謙一

銀河研究には多くの未解決問題があり、それらを解明するためには多波長観測が必須である。すばる望遠鏡は、星や電離ガスの様子を詳細に描きだすことができる。また、その広視野性能を活かして一度の観測から数万個規模の銀河のサーベイが可能である。一方、ALMAを用いた高分解能観測から、塵につつまれた星形成や星間物質の運動の様子が明らかになる。実際に、両者の観測結果を組み合わせることによって、初期宇宙から近傍銀河に到るまで数多くの成果が出ており、二つの望遠鏡の連携が今後ますます重要となることは間違いない。本セッションでは、これまでの電波と光赤外観測のシナジーをレビューし、今後のALMA/すばるによる銀河研究の方向性を議論することを目的として企画された。基調講演と口頭発表合わせて15件（うち10件が遠方銀河、5件が近傍銀河）の発表の申し込みがあり、ALMAとすばる望遠鏡による観測結果だけでなく、理論シミュレーションとの比較の重要性についての資料も提供された。今回は、コロナウィルス感染拡大に伴い資料の閲覧のみとなったが、1-2年後を目処に本セッションの続編を企画し、多波長観測による銀河研究の議論を継続する予定である。

[SPICAが切り拓くサイエンス]

世話人：泉拓磨，井上剛志，江草実実，尾中敬，
長尾透，野村英子，平野照幸，本田充彦

SPICAは「宇宙が重元素と星間塵により多様で豊かな世界になり、生命居住可能な惑星世界をもたらした過程を解明すること」を科学目的とする大型冷却赤外線宇宙望遠鏡計画である。この冷却望遠鏡の性能を最大限に活かすことで、波長10-350ミクロンの範囲で革新的な観測感度が実現する。このSPICAが天文学・天体物理学・惑星科学にもたらし得るブレイクスルーについて議論するため、宇宙科学研究所のSPICA研究推進委員会により組織されたSPICAサイエンス検討会に約70名の研究者が参加し、検討活動

を進めてきている。本企画セッションは、このサイエンス検討会における検討結果をコミュニティに報告すると同時に、幅広いサイエンスのアイデアについて募集する一般講演も通して、SPICAが切り拓くサイエンスを明らかにすることを目的として企画された。

本企画セッションは4時間を想定して講演を募集したが、想定を上回る申込があったため、何人かの講演希望者に講演形式の変更を依頼せざるを得なかった。そうした調整の結果、基調講演3件、a講演11件、b講演14件、c講演5件の計33件の講演で本企画セッションを行うことになった。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大により年會が中止され、本企画セッションを行うことができなくなったことは大変残念だった。ただし33件の講演の全てについて講演者により講演資料が提出され、ウェブ上で閲覧ができる形になったため、SPICAによるサイエンスについて広くコミュニティが考える機会を設けるという目的を達成できたと考えている。

金田英宏氏（名古屋大学）による基調講演資料では、SPICA計画の現状や観測装置のレビューを踏まえ、超高感度での赤外線分光および偏光観測により切り拓かれるサイエンスを概観していただいた。SPICAの感度を持ってすればSKAが見つかるであろう赤方偏移15のブラックホールに付随するダストでさえ性質の診断が可能であり、またユニークな中間赤外線高分散分光により原始惑星系円盤におけるスノーラインが調査できる、という紹介は圧巻であった。また泉拓磨氏（国立天文台）による基調講演資料では、サイエンス検討会の活動紹介に引き続き、これまで調査が不十分だった遠方赤外線銀河における星形成と巨大ブラックホール成長がSPICAにより徹底的に暴かれることが示された。そうした赤外線銀河におけるガスの動力学やダスト進化も明らかになることで、これまで発見の研究が主だった遠方赤外線銀河の物理がようやくSPICAで解明されるという報告は、大変印象深いものだった。さらに平野照幸氏（東京工業大学）による基調講演資料では、分子雲フィラメントや分子雲コアの磁場測定がSPICAの卓越した遠赤外線偏光撮像サーベイ能力によって従来の研究と比べ物にならない程の進展を遂げ、星形成の開始条件についての知見が大幅に深まることが指摘された。また原始惑星系円盤について従来は困難だった円盤ガスの定量化や水スノーラインの調査、固体物質の鉱物学的解析が進み、系外惑星の大気組成についても中間赤外線高分散分光で多様な分子の調査が可能になることが示された。いずれの基調講演においても共通して、人類が赤外線で見える宇宙像という観点で、SPICAが圧倒的なブレイ

クスルーをもたらすことが示されていた。この結論は、個々のトピックについての一般講演によって更に具体的かつ定量的に示された。

[天文学史の最新研究動向]

世話人：谷川清隆，相馬充，玉澤春史

天文学会年会における天文学史の発表は通常「天文教育・広報普及・その他」セッションにて散発的に発表される他、企画セッションとしては2014年春季年会において「天文学史とその資料収集・調査・研究」が開催されている。近年の動向をみると資史料の発掘手法や解釈の進展、アーカイブの整理、情報学と人文学の密接な連携（デジタルヒューマニティーズ）、放射性同位体分析の高解像度化などにより、歴史上の自然科学現象の解釈やそれをうけての歴史学的解釈の進展という流れは天文学や地球惑星科学の諸分野に近年急速に広がっている。天文学会年会の場でこの近年の流れをさらうことを理由に本セッションを企画した。招待講演はいずれも天文学会員以外から募り、歴史史料を使った自然科学研究では実績のある地震学分野から加納靖之氏より現状のレビューをお願いした。また、歴史史料を使ったオーロラ研究として、三津間康幸氏にはバビロン天文日誌を用いた歴史的な天文現象についての研究、岩橋清美氏には近世史料における天文現象記録と自然認識についての講演をしていただいた。企画セッションということで非会員からの申し込みもあり計18件の申し込みがあった。また、本企画セッションを機に天文学会に入会していただいた方もいる。残念ながら通常の発表は行えなかったが、提出されたファイルは力作ぞろいである。講演予定だった方からは世話人へ「今度はいつ開催するのか」といった質問も個人的に流れており、遠くないうちに再度企画できればと考えている。

[突発現象天文学と大学教育における大学望遠鏡のシナジー]

世話人：山中雅之，宝田拓也，野上大作，森鼻久美子，村田勝寛

本セッションは光赤外線大学間連携事業（OISTER）が中心となり2020年天文学会春季年会の3月16日・17日に開催が企画された。総講演数はr講演6件，a講演16件，b講演5件の計27件だった。突発現象をターゲットとしたOISTERと多波長観測や理論とのシナジー、本格的に始動した「せいめい」望遠鏡が加わる連携観測の促進、望遠鏡・観測装置を有する大学研究室単位の研究者の情報交換などを目的として開催された。川端弘治氏によるOISTERのこれまでと目指すべ

き姿に関する基調講演を皮切りに、内山瑞穂氏・前田啓一氏・志達めぐみ氏から電波・理論・X線とOISTERのシナジーについて基調講演が組まれた。また、木野勝氏から京都大学が開発した光赤外線新技術望遠鏡「せいめい」に関する基調講演、行方宏介氏によるせいめい・OISTER・TESS・NICERのシナジーについて基調講演が予定された。

16日13:00からセッションが割り当てられた。電波望遠鏡における突発現象や大学教育に関する講演、OISTERの枠組みにおける共同開発に関する講演、連携観測の実現に関する講演・教育事業に関する講演などがあった。この日は、最後に20分の予定で全体討論として「大学望遠鏡における教育活動やOISTERに求められていること」についての議論が予定された。2日目09:30からは、東京大学が開発するTAO 6.5メートル望遠鏡に関する講演を先頭に、同じく東京大学木曾観測所で運用が開始されたTomo-e Gozenに関する講演が並んだ。その後、重力波・超新星などの突発現象に関する講演があった。同日13:00からはOISTERの枠組みで連携観測が実施された激変星・X線連星・フレア星に関する講演が並んだ。

OISTERにおいては、突発現象の連携観測に関して多くの研究成果が実を結びつつあり、PASJ特集号の出版が予定されるなど精力的な活動が続いている。半数以上が若手大学院生・ポスドクが筆頭の研究成果であることは高いレベルの教育・人材育成の観点でも特筆すべきことである。さらに、OISTERの枠組みと多波長・理論などとの共同研究の動きも見られ、更なる「枠組み」間のシナジーへの発展も大いに期待される。現地での開催には実現されなかったものの、研究成果・将来性の双方に充実した講演群となった。

<ジュニアセッション>

第22回ジュニアセッションは、天文学会最終日3月19日(木)に開催が予定されていたが、年会中止に伴いセッションは実施されなかった。今回は総数63件の発表申し込みがあり、昨年度の56件から増加した。発表者の延べ総数は258名であった。発表形式の内訳は、5分間の口頭発表とポスターの組み合わせが36件、1分間のショートプレゼンテーションとポスターの組み合わせが19件、ポスターのみの発表が9件であった。口頭講演には、タイの高校生による発表6件が含まれている。プログラムおよび予稿集は、ジュニアセッションホームページ (<http://www.asj.or.jp/jsession/2020haru/22nd.html>) で公開されている。

開催中止に伴い、ジュニアセッション実行委員会としては以下の対応を行うこととした。(1) 予稿提出

をもって発表と見なす(学校等の実績となる)。(2)発表者に参加証と予稿集を送付する。(3)ポスターあるいは同等の発表資料をジュニアセッションHPで公開し、それに対してコメントを受ける「Web発表」を行う。ただし、発表者側の個別事情があるため必須とはしていない。

ジュニアセッションでは、例年参加者同士またプロの研究者との濃密な議論が繰り広げられ、生徒たちのみならず指導する先生方も強い刺激を受けて、天文学研究への理解と研究力向上につながってきた。今回やむを得ない事情により開催できなかったことは大変残念だが、実行委員会および世話人は、生徒の自由な発想による研究を尊重するとともに、全体的な研究・発表のレベル向上を目指してさらに運営の改善を行っていきたいと考えている。引き続き天文学会会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

最後になったが、本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会、高校生天体観測ネットワークとの共催で行われた。また、今回はジュニアセッション翌日から開催される予定だった「つくばScience Edge 2020」(中止)と相互に協力して準備を進めてきた。関係各位に篤く御礼申し上げます。

(山村一誠)

(年会実行委員長: 酒井剛)

会員名簿掲載情報受付のお知らせ

今年も隔年で発行している会員名簿の更新時期になりました。今回発行する名簿も前回同様、以下の方針で発行することになりましたので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

●原則全員掲載項目

1. 会員種別・番号(必須)
2. 氏名(必須)

3. 所属(or業種)
4. 所属先の電話番号(★注)
5. Eメールアドレス(学会に登録してあるアドレス)
- 希望者のみ掲載項目
6. 自宅住所
7. 自宅電話番号

※次の方のみご連絡ください。

- ・登録情報に変更がある方
- ・原則全員掲載項目の3.を一般的職種名に書き換えた方
- ・原則全員掲載項目の4.5.で非掲載希望項目がある方
- ・希望者のみ掲載項目の6.7.に掲載したい方

《縮切: 6月30日(必着)》

※前回の名簿発行の際に掲載項目について連絡していても、新しい名簿データ作成の前にはリセットされますので、上記にあてはまる方は改めてご連絡ください。

※ご連絡がない限り、「原則全員掲載項目」(1~6)のみが掲載されます。

掲載内容は、会員登録データに登録されているもの(入会届や変更届に記載のもの)になります。

(★注) 所属先の電話番号に個人の携帯番号と思われるものを登録される方がいらっしゃいます。ご連絡がない限りその番号が掲載されますのでご注意ください。

連絡方法

日本天文学会ホームページのトップページ「会員へのお知らせ」リンク先の回答用テンプレート「会員名簿カードテンプレート」を使用し、kaiin@asj.or.jpまでEメール送信して下さい。

Eメールがない方のみ、巻頭の綴じ込みハガキをご利用ください。

天文月報編集委員より

天文月報オンラインでは、緊急事態宣言を受け思うように外出もできないこの時期に、多くの天文に興味を持つ方にお読みいただけますよう、発行後一年間は会員限定で公開している一部の記事を、すべて公開しております。普段はすぐに読めないシリーズや雑報などもお読みいただけます。少しでも多くの皆様にお楽しみいただけますよう、周りの皆様にお知らせいただければ幸いです。

天文月報オンライン/投稿用アップローダーのIDとパスワード

ID: asj 2005

パスワード: 雑誌コード (5桁の数字と) **vol113** (6文字) の計11文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

松田有一 (委員長), 市川幸平, 岩井一正, 江草実実, 岡部信広, 押野翔一, 小高裕和, 嘉数次人, 小宮山裕, 滝脇知也, 富田賢吾, 中村航, 西塚直人, 秦和弘, 福井暁彦, 前原裕之

令和2年5月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円 (本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359 (事務所) / 0422-31-5488 (月報) Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595

日本天文学会のウェブサイト <http://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会 2020年 (本誌掲載記事は無断転載を禁じます)